

平成 2 6 年 6 月 6 日現在

機関番号： 1 2 3 0 1

研究種目： 若手研究(B)

研究期間： 2012 ~ 2013

課題番号： 2 4 7 0 0 5 3 8

研究課題名（和文）ペアレント・トレーニング保育士版の効果に関する研究

研究課題名（英文）A study of effectiveness of parent training for teacher

研究代表者

十枝 はるか（Toeda, Haruka）

群馬大学・保健学研究科・講師

研究者番号： 3 0 3 8 0 8 3 5

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000 円、（間接経費） 540,000 円

研究成果の概要（和文）：保育士7名を対象とし、作業療法士がペアレント・トレーニング保育士版を用いて介入することで、その保育士が担当する発達障害の疑いのある子どもの「気になる行動」が改善するかを調査した。その結果、介入後において保育士が感じている子どもの「気になる行動」の「重要度」は有意に低下し、「満足度」は有意に向上した。さらに終了1ヵ月後においても持続した。子どもの「気になる行動」の改善を示す「遂行度」は介入後では変化は認められなかったが、終了1ヵ月後には有意に向上した。ペアレント・トレーニング保育士版は、保育士の「満足度」を上げ、最終的に子どもの「気になる行動」も改善できる効果的な研修の1つであると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study were: for occupational therapist to intervene with 7 nursery school teachers who teach children with behavioral problems using the parent training program for teacher, and examine the effects of intervention on children's behavior. As the results, the teachers' "importance" about the children's behaviors significantly decreased and the teachers' "satisfaction" significantly increase after the intervention. Additionally the effectiveness was ongoing a month. The childrens' "performance" that show improve the children's behavioral problem did not change after the intervention. On the other hand, one month later the children's "performance" significantly increase. The parent training program for teacher is effective training to improve the teachers' satisfaction and finally improve the children's behavioral problem.

研究分野： リハビリテーション科学・福祉工学

科研費の分科・細目： 作業療法学

キーワード： 作業療法士 保育士 発達障害 早期発見 早期支援 ペアレント・トレーニング

## 1. 研究開始当初の背景

2005年に発達障害者支援法が施行され、同法の中で、自閉症、アスペルガー症候群などの広汎性発達障害(以下、PDD)、注意欠陥多動性障害(以下、AD/HD)、学習障害などの発達障害をもつ子どもの早期発見・早期支援が地方自治体の役割として唱えられた。

長崎県においても、「発達障害児早期発見、相談支援体制整備事業」を実施し、これまで早期発見が困難であった発達障害を乳幼児健康診査(以下、健診)においてスクリーニングする研究と実践を行ってきた。長崎県は2004年～2005年にA市をモデル地区とし、1歳6か月健診における自閉症スクリーニング精度向上のために、健診に自閉症スクリーニング検査を取り入れ、その有効性を検証する試みを行った。その結果、フォローアップへ繋いだ児が健診方法改訂前の1.85倍になり、新しい項目を取り入れた健診方法が発達障害スクリーニングに役立つ可能性が高いことがわかった<sup>1)</sup>。続いて、2006年～2007年A市の3歳児健診において、問診票にPDDの特徴項目4つと、AD/HDの特徴項目4つを加え、さらに2次スクリーニングとして保健師による個別の簡易検査と医師による個別直接観察を行った。この結果、フォロー又は精密検査必要と判断された児が、健診改訂前には3.6%だったのが、改訂後には7.25%となり、有意に発見率の向上を示した<sup>2)</sup>。

「発達障害早期発見、早期支援体制整備事業」のモデル地区であったA市における2010年度3歳児健診において保健師等での発達障害リスクの気づきは健診受診児数の16.1%であり、高い発見率は維持されていた。しかしながら、医療機関に繋がったのは、その内の7.86%であった。さらに、発達障害を診断できる専門機関のないB市においては、高い健診受診率(98.2%)で、かつ保健師等による発達障害リスク児の気づきが、健診受診児の29.4%でありながら、その内、医療機関に繋がったのは0名で、相談・療育機関に繋がったのは1名のみであった<sup>3)</sup>。

このように、早期発見の研究と実践が進んでも、専門機関による専門的な支援が早期に開始できていない現状がある。ましてや、専門機関のない地域においては、早期支援が進みようもない現実がある。B市においては、3歳児以上の就園率は80%を超える<sup>4)</sup>など、他の地域よりも高い値である。B市においては、発達障害の疑いのある子どもの多くが、専門的な支援をうけないまま保育所に在籍して

いると推察される。

長崎県は「発達障害早期発見、早期支援体制整備事業」の一環として、2006年にペアレント・トレーニングを導入した。ペアレント・トレーニング<sup>5)</sup>とは、心理学の研究成果を活用した行動療法に基づき、不適切な行動を減らし適切な行動を促すための心理社会的治療である。子どもの行動改善に効果があることが数多くの研究により明らかにされている。米国ではAD/HDへの包括的治療の二本柱として薬物療法に並んで重要視されており、我が国でもAD/HDの診断治療ガイドライン<sup>6)</sup>において「基本治療キットの次段階で考えるべき有用な治療法」と推奨されている。実施形態は、グループで行うペアレント・トレーニングが主流になってきている。発達障害者支援法の影響もあり、障害児支援あるいは子育て支援の一環として注目されており、高機能自閉症をもつ子どものペアレント・トレーニングも実施されるようになってきた。長崎県においては、まずは専門機関においてAD/HDと診断された子どもの親を対象としたペアレント・トレーニングの普及を図った。その後、2008年からは、発達障害の早期発見者となり得る保育所の保育士等を対象としたペアレント・トレーニング保育士版(以下、ティーチャー・トレーニング)を実施するようになった。診断はつかないが、保育士が保育上で「気になる」と気づいた子どもを支援できる体制として、作業療法士(以下、OT)等の専門家がティーチャー・トレーニングを用いた保育士との協働の試みが始まっているのである。

## 2. 研究の目的

OTは、生活モデル型の発達支援を行う役割がある。専門機関のない地域において、子どもの生活の場である保育所でティーチャー・トレーニングを実践し、その効果検討を行うことは、OTが果たすべき役割の一端であると考えられる。そこで、本研究は、ティーチャー・トレーニングを用いてOTが保育士と協働するなか、発達障害の疑いのある子どもの行動特徴が改善するかどうかを調査することを目的に実施する。本研究では、発達障害の疑いのある児が、支援のないまま多数在籍していると思われるB市の保育所において、OTが保育士を対象にティーチャー・トレーニングを実施し、保育士に「子どもの行動チェックリスト教師版：Teacher's Report Form(以下、TRF)」<sup>7)</sup>と「カナダ作業遂行測定：Canadian Occupational Performance Measure(以下、COPM)」<sup>8)</sup>を実施し、ベースライン前、介入前・後、ベースライン後で比較し効果を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1)研究デザイン

平成 24 年度、25 年度ともに、研究内容は同じである。OT がティーチャー・トレーニングを実施する期間を介入期とし、介入期の前後に約 1 か月のベースライン期を設け、各期の前後、すなわち、ベースライン前、介入前・後、ベースライン後の 4 回効果測定を行う。時期や対象者が変わっても同じ効果を示すことができるかを検討した。

### (2)対象

B 市の保育所に在籍する年長児（5 歳児）を担当する保育士で、保育上「気になる」行動のある児を担当している保育士を対象とした。平成 24 年度と平成 25 年度で、計 7 名の保育士が対象となった。

### (3)効果測定法

子どもの行動に対する客観的な測定方法としては TRF を用い、子どもの行動に対する保育士の主観については COPM を用いて計 4 回測定した。

#### TRF

TRF は、ペアレント・トレーニングの効果判定に国際的にも使用されている「こどもの行動チェックリスト：Child Behavior Check List」の教師版である。学校等における子どもの行動や情緒的な問題について教師がすることで信頼性・妥当性が示され、わが国でも標準化されている。各行動の得点は、教師によって 0～2 点の 3 段階で評価し、得点が高いほどその行動が顕著に表れていることを示す。引きこもり尺度、身体症状尺度、不安/抑うつ尺度を含む内向尺度、非行的行動尺度、攻撃的行動尺度を含む外向尺度に、社会性、思考、注意の問題尺度を加えて総得点とされている。

#### COPM

OT によって開発された評価法である。対象者にとって意味のある作業を探し、作業療法を行った後で、その作業に対する対象者の思いに変化があったかどうかを測定できるとされている。対象者に作業遂行の問題を語らせ、各作業や行動の「重要度」で点数化してもらうことで対象者にとっての意味のある作業を探し、その作業の「遂行度」と「満足度」も対象者に点数化してもらい、主観の変化を捉える。点数は 1～10 点で評価してもらい、高いほど「重要度」「遂行度」「満足度」が高いことを示す。

本研究では、対象者である保育士に発達障害の疑いのある子どもの「気になる」行動を自由に記述してもらい、その後、OT による面談によって「気になる」行動を明らかにし、かつ「気になる」度合としての「重要度」を用いて評価してもらうこととした。そして、子どもの行動が、保育士から見てどのくらいできているかを「遂行

度」によって評価してもらい、子どもの行動に対する保育士の「満足度」がどれくらいかを評価してもらった。

### (4)実施内容

対象者が所属する保育所にて、ティーチャー・トレーニングを実施した。ティーチャー・トレーニングの実施期間は、隔週 1 回 1 時間、全 10 回、約 5 か月に渡った。毎回、対象者が所属する保育所の休憩時間 13:30～14:30 に実施した。ティーチャー・トレーニングとは、ペアレント・トレーニングを保育士へ応用したものである。また、ティーチャー・トレーニングは、21 世紀における国民健康づくり運動を推進するために必要な参加的・対話的学習方法をとっている。各回は、ホームワークの報告、テーマ学習、次回までのホームワークの説明の順で行う。ホームワークの報告では、時にアドバイス等も行いが、対象者が頑張って取り組んだことを称賛し、辛い場面を共感しあい、互いに認め合う「グループの凝集性」を大切にしている。このように対象者の安心と安全が保障できる環境の下、子どもの行動と自分の対応、子どもに対する感じ方を客観視し、出来る範囲で子どもの行動のとりえ方を拡大し、ほめ方や指示の出し方等の新たなスキルを学び、すぐに実践し、振り返りながら、その子どもに合った対応が身につけられるよう支援してくプログラムである。

## 4. 研究成果

各年度 1 回ずつ、ティーチャー・トレーニングを実施し、対象者は計 7 名であった。

### (1) TRF の結果

TRF 総得点の平均の推移を図 1 に示す。

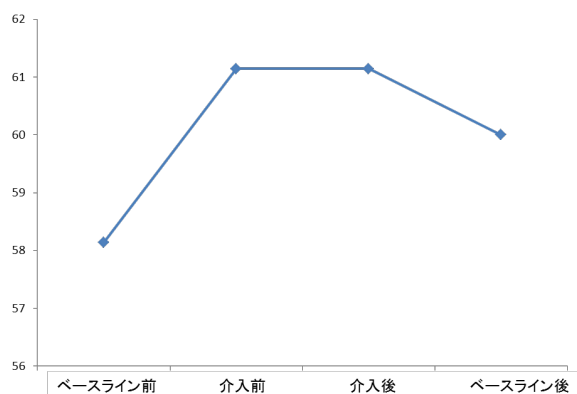


図1. TRF総得点の平均の推移

フリードマン検定を行ったところ P 値=0.50 となり有意差は認められなかった。

### (2)COPM の結果

自由記述からは、保育士 1 名につき「気になる行動」が 3～5 つ挙げられ、全部で 29 項目となった。

29 項目行動について COPM で測定した保育士の「重要度」の平均の推移を図 2 に示す。

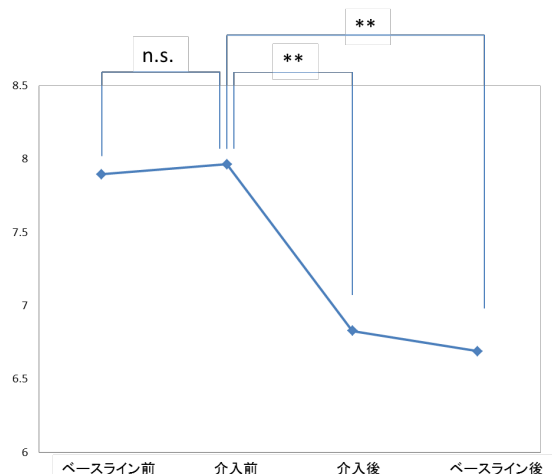


図2. 重要度の平均の推移

フリードマン検定を行ったところ、 $P<0.001$  となり有意な変化を認めた。さらに、ウィルコクソンの符号付順位検定を行い、ボンフェローニの不等式による修正を行ったところ、介入前から介入後、介入前からベースライン後において有意な低下が認められた( $P<0.01$ )。

次に、子どもの「遂行度」の平均の推移を図 3 に示す。

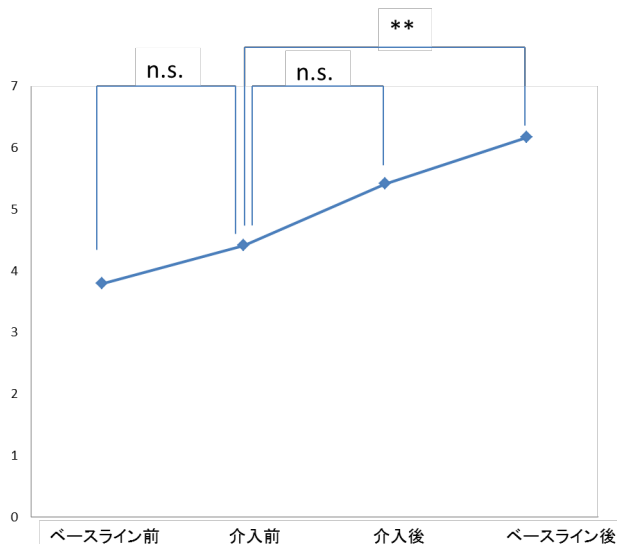


図3. 遂行度の平均の推移

フリードマン検定を行ったところ、 $P<0.001$  となり有意な変化を認めた。さらに、ウィルコクソンの符号付順位検定を行い、ボンフェローニの不等式による修正を行ったところ、介入前からベースライン後において有意にのみ向上した。

同様に、保育士の「満足度」の平均の推移を図 4 に示す。

フリードマン検定を行ったところ、 $P<0.001$  となり有意な変化を認めた。さらに、ウィルコクソンの符号付順位検定を行い、ボンフェローニの不等式による修正を行ったところ、

介入前から介入後、介入前からベースライン後において有意に向上した( $P<0.01$ )。

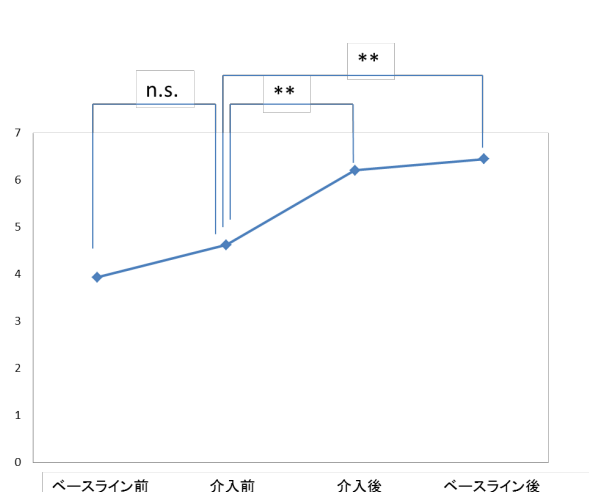


図4. 満足度の平均の推移

### (3)考察

ティーチャー・トレーニングを受け保育士は「気になる行動」の「重要度」が低下したことから、「気になる」度合いが下がったと考えられる。さらに介入後においては、子どもの「遂行度」に変化はなくても保育士の「満足度」は向上したことから、保育士の子どもの行動に対する捉え方が変化し、子どもの行動そのものには変化がなくても子どもとの関係に満足できるようになったと考えられる。保育士が子どもの行動に満足することによって、1ヵ月後には子どもの行動が改善したと推察できる。

本研究で、発達障害の疑いのある「気になる」子どもの行動改善が示せたことで、B市のように専門機関のない地域でも、OTによる間接的支援で効果が示せることが発信できる。さらに、診断名の有無に関わらず何らかの困難さを感じている子どもたちに保育士が「気になる」という気づきと同時に支援を開始できる生活モデル型の効果的な体制づくりの先駆けとなりうる。これは、文部科学省が通知した「特別支援教育の推進」<sup>9)</sup>や厚生労働省が見直した「障害児支援」<sup>10)</sup>の在り方の一つとして提案でき、発達障害児を薬物療法といった医療の対象となる前に、適切な保育・教育環境による発達支援を提供することができる地域社会<sup>11)</sup>の構築に寄与していけるものとなる。そして、まさに生活モデル型の支援ができる人材を養成する指導者としてOTが貢献できることを示すことができると考えられる。

### 参考文献：

- 1) 長訓子, 松坂哲應, 柿田多佳子, 岩永竜一郎, 十枝はるか: 長崎県における1歳6ヵ月健診での自閉症児スクリーニング精度向上に向けた取り組み・長崎県作業療法研究, 3(1)8-12, 2006

- 2) 岩永竜一郎, 松坂哲應, 日野出悦子, 十枝はるか: 3 歳児健診における新項目導入の効果. 第 44 回日本作業療法学会 P185, 2010
- 3) 西海市健康づくり課: ティーチャー・トレーニングに関するデータ提供. 2011
- 4) 長崎県こども政策局こども家庭課: 平成 23 年度 4 月 1 日現在における保育所在籍児数. 2011
- 5) Whitham C: Win the Whining War & Other Skirmishes: A family peace plan. Los Angeles, Perspective Publishing, 1999 (上林靖子他訳: 読んで学べる AD/HD へのペアレント・トレーニング. 明石書店, 東京, 2002)
- 6) 齋藤万比古, 渡部京太: 注意欠陥/多動性障害 - AD/HD - の診断・治療ガイドライン改定版. じほう, 東京, 2006
- 7) Achenbach, T.M.: Manual for Teacher's Report Form and 1991 Profile. Burlington, VT. University of Vermont, Department of Psychiatry, 1991
- 8) Law M., Carswell A., Polatajko H., Baptiste S., McColl M. (著), 吉川ひろみ(訳): COPM カナダ作業遂行測定. 第 4 版, 大学教育出版, 東京, 2006
- 9) 文部科学省: 特別支援教育の推進について (通知), 2007
- 10) 厚生労働省: 障害児支援の見直しに関する検討. 2008
- 11) 齋藤万比古: 特集 ADHD (Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder) をめぐって 現状と課題. 児童青年精神医学とその近接領域 51(2):67-76, 2010

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 2 件)

Haruka Toeda, Ryoichiro Iwanaga, Hideki Miyaguchi, A Study of parent training for teacher. The 16<sup>th</sup> Congress of the World Federation of Occupational Therapists, 2014 年 6 月 18 日, パシフィコ横浜  
 十枝はるか, 岩永竜一郎, 泉純子, 津本保弘, 宮口英樹, ペアレント・トレーニング保育士版の効果に関する研究. 第 47 回日本作業療法学会, 2013 年 6 月 28 日, 大阪国際会議場

〔その他〕

ピース to ピース ホームページ  
<http://p-to-p-happy.jp/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

十枝 はるか (Toeda Haruka)  
 群馬大学・大学院保健学研究科・講師  
 研究者番号: 30380835